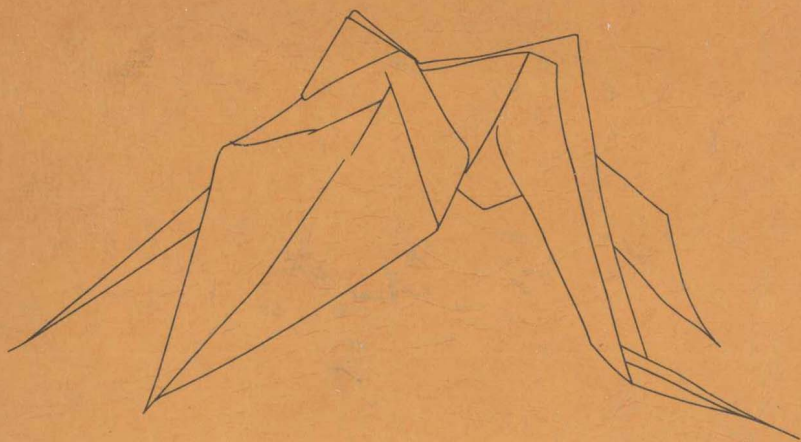




鶴

岩名雪子戲曲集

鶴
岩名雪子戯曲集

著 者 岩 名 雪 子

発行 者 岩 名 雪 子

〒177

東京都練馬区西大泉一―九―九
〇三(九二四)二四二五

昭和六十二年五月二十八日発行

印刷 株式会社三田村印刷所

若き住職

一幕……………一

寿永早春

三場……………二七

群蝶壇ノ浦

一幕……………六三

小田原遅参

二幕……………八七

喜劇優秀家族

三幕四場……………一七

築地明石町

一幕……………一八五

鶴

五場……………二〇九

喜劇狐退治

一幕……………二三五

冬桜

一幕二場……………二五三

春嵐元禄十一年

一幕三場……………二八三

浅野内匠頭家來

五幕十四場……………三〇五

梅聞元禄曆

一幕……………四一七

女王クレオパトラ

六幕十二場……………四四三

釋迦族の滅亡

四幕……………五四五

あとがき

……………六〇三

若き住職 一幕

人 物

住職

長老

檀家の男

小坊主の母

僧 貞学

小坊主三人

その他 多勢の僧達

昭和八年頃。

越後の或る裕福な寺の廣間。前も奥も庭のこゝろ。上手は内房。下手の本堂とは渡廊下で連がつてゐる。春酣なる頃の一日。午後から夕暮れ刻にかけて。

幕開くと、本堂にて讀經の終る氣配。鐘の音。人々の静かなざはめき。

やがて、小坊主を先に、若い住職が美しい法衣姿で本堂から渡廊下へと出て来る。

續いて多くの僧侶達。皆々内房の方へ去る。後れてこの寺の老僧、人々から長老と呼ばれてゐる八十歳に間もない温雅な風貌態度共に具つたのが出て来る。彼が丁度廣間の中央にさしかゝつた時、羽織袴の參詣人らしい初老の男が小走りにその後を追つて来る。

男
もし。長老様……。

長老
(ふり返り。) おゝ。何ぞ御用か喃。

男
少々な……。手間はとらしましね。

長老
奥へお通りないし。たまには緩くりしておいでたらよかろが喃。

男
いやその、内證事で喃。

長老
ははは。では先づお坐らないし。

二人坐る。

男
他でもござりましたねが、墓地の一件で喃。方丈様にお話し下さりましたろか。

長老 い、や。まだ申上げてはありましたが、確かに定まつた上での思ひまして喃。

男 あ、あ。それで助りました。私も寺の事ではあるしするから、二つ返事でお前様へ「なに、私の地所だ。差上げませう。」と請合ふたもの、いやはや、名義は自分持ちでも権利は伴が握つてゐる始末で喃。「俺にも相談なしで年寄が勝手だ。」とひどく叱られて……。申上げ憎い話だが、こゝは長老様、お前様の一存で、なかつたものと願はれますまいか。いやなに、伴も、他の事と違つて先祖代々の骨を納め後生を弔らうて貰ふ寺の事だすかて、厭とは申しましね。したが喃。時節が時節で喃。……折合ひをつけて貰ひたい……。いや、これは伴が腹を私が測つてみての話だが、さうなれば世間と違つていかにも穢うなるで喃。長老様だすかて昔馴染甲斐に願はれるのぢや。どうか、一つ……。喃。

長老 あ、よろしうござりますとも……。よう分りました。とんだ御心配をかけて濟みましねかつた喃。私一人、まだ誰人にも寺の内には言うてござりましねば安心して下されや。墓所も三年が五年のころ狭いといふでもなし、丁度お前様方が地續きのおかげで御迷惑がかかつたわけで喃。私も決して、いさ、かも悪うは思ひましね。お前様も喃、ちつとも氣に病んで下さるなや。

男 申譯もござりましね。あ、あ、年齢はとりたくないもんだ。何時ともなう手前の子に叱られて恥かしい目をするやうになりましたわい。

長老 これ皆な世の中の慣はしでござりませう。子は親よりも賢うなるもんですぞや。はははは。

ピアノの音。

男 何の音でござりますね。

長老 ピアノといふもんで喃。

男 はあ、なるほど。聞いた音色だ。（耳をかたむける。）鳴らし手は……。 （長老の顔を覗き込む。）

長老 （微笑して。）方丈様が弾きなさるのでござります。

男 方丈様が……。へい！なるほど喃。何時お寺へ入りましたね。

長老 上方からお歸りなされると同時に、あれも着きました。

男 買ひなされたので？ ふ、む。東京の學校においてなされた時にでも鳴らし方を覚えなされたのでござりませうかねし。

長老 もともと幼い頃から音曲が好きでをられるで喃。七八つの時分は三味線をやりたいてとて喃。

男 さうさう。お寺の坊さんが三味線弾きに仕込むと言ふ大した評判でござりました喃。

長老 なにせ、寺では喃。それからオルガンでござりました。これなら學校でも教へるもんだすかて、寺で鳴らしても差支へあるまいとて買ひなされたが、上手になれりと耶蘇教の讚美歌ばかりで喃。

男 讚美歌といふものは、お經の類ひでござりませうかねし。

長老 お經……とは異ひますだろ喃。お經は法の道を書いたものを、節をつけて誦み上げる。耶蘇教の教は、

聖書といふものがあるで喃。それに節をつけて歌ふたら、お經と同列にも譬へられようが……。さうぢや喃……。御詠歌の類ひとでも申さうか喃。

男 は、あ。それでは考へものぢや。お寺の中から耶蘇教の御詠歌が外へ洩れては、いかに何でも喃。

長老 御本人ばかりならよろしかつたのぢやが喃。何分にも若い修行の者を預つてゐる、その者等と一緒に歌ひ出す。學校で習ふ唱歌と聲の出し工合がそっくりな故もありましたらう。先代もこれには考へなされて喃。學校へ寄附してしまはれた。弾きたくば學校で弾けと言はれて喃。だが、好きな道は止め

られぬらうござります。毎日あのやうになされる。もう讚美歌は歌はれぬが、弾かれる間が手間が要つて喃。したがまあ、外に御道樂とはなし、惻然な上にもよう出来てゐなさるで喃。寺は安泰でござります。私もやつと重荷を下ろしましたでば。

三代に仕へておいでの上に、若い方丈様の面倒やら代り役だすかて、お前様も苦勞なさりましたらう喃。

長老 十歳で上りまして七十年に二つ足らぬ寺の内のあけくれ、御佛の守護をいたゞいて、たゞ一筋に、ほんに眞直ぐに喃。自分でも過して來たと思つてをります。

男 お前様のやうなお方は搜しても居られることでありましね。この節の坊さんは、學問をすればする程、並の人間と同じにくだけるらうござります喃。權も八も支度が同じ。我々から言はせれば、教員は教員らしく、商人は商人らしく、百姓は百姓らしく、大家はおおやけ大家らしく、普通家は普通家らしくするが、おだやかな定りだと思ひます。あのお方は先生ですか？ い、んや、お寺の若方丈様だ。なあんだ。洋服姿だからよ。かうでは……なにせ、田舎でござりますから喃。

長老 (さからはず。) もつとも、もつとも。

男 (いさ、か圖にまつて。) ときに長老様。お倉の後ろの洋館建ては何でござります。

長老 あ、あれは託兒所と申して喃。田畑や蠶様の忙しい時に近郷近在の子等を預からうというて喃、いま大急ぎをして居りますでば。

男 へい。在所は三ヶ村。何れも半道以上の道程があるが、わざわざ子供等を預けに來ますか喃。

長老 半道くらゐお前様。一日中の手足絡ひを誰かゝ集めて車にでも乗せて來いば、手數のかゝるほどのことはありますまい。

男 して、誰方が世話するのでござりますね。

長老 寺の者が皆して面倒みるつもりだが喃。子供はやはり女手が一番よい。町の女學校を出て家に居る有志の衆にお願ひしてはと、よりより協議中だが喃。

男 結構な話ではござりますが、有志の娘達と……。むろんのこと、たゞ働きでござろ喃。

長老 いや、いや。お禮は月々差上げます。

男 それではつまり、月給取りなわけで。

長老 たゞ喃。學校の教員同様に奉公の心がけを願ひたいのぢや。

男 (急に碎けて。)それはもうお前様。務めとなれば誰でも一生懸命でござりますともね。うちにも、新發田の女學校を出て二年になるに未だぐらりしやらりと遊んで居るのがござりますが、何と長老様、一つ、寺の爲にコキ使つてやつて下さりましねか。いかにも遊んでゐることは勿體ない話でござりますから喃。

長老 お、お。三番目の娘さんが喃。さう大きうならしたか喃。

男 何分、どうか宜しう願ひますで。お寺も葬式供養の役ばかりでは安閑として居られなくなります喃。時代が時代ですから喃。若い方丈様のなさる事だ。何事を仕出かしなさるやら分りましたねど。はははは。

長老 この寺も只今の代で十五代でござりますで喃。徳川様なみに變りのある時機かも知れませぬ喃。

小坊主が来る。

小坊主 長老様。大工さんがさつきから待つて居ます。

長老 さうか。いま直きに行きませう。

小坊主去る。

男 では、おいとまませうでござります。(立上る。)どうかあの一件は内々に済ませて下さりませ。

長老 あゝ、あゝ。御心配なされぬやうに喃。(立上る。)

男 (本堂の方へ行きかけて。)これからが又何かと後始末でござります。

長老 結構な日和の法事で、集まられた衆も幸ようござつた喃……。ご免ないし。(男の去るを見送つて上手へ入る。)

ピアノの音高し。間もなく、小坊主一人がボールの道具を持つて内房の方から前庭へ出て来る。慣れた様子で二人の小坊主が投げ合ふ。

小坊主一 いゝか。カウントするぞ。

小坊主二・三 よーし。やつてくれ。

小坊主一 (兩者の中央に立つて。)プレーボール。

小坊主二人は眞剣に投げ合ふ。その一人が受け損ねる。

小坊主一　　ワン！

小坊主二　　今のはノーカンだ。

小坊主一　　プレーをかけた後だ。審判の威信を傷つけるな。

小坊主二　　はいはい。（氣取つてモーションをつける。）行くぞ。

小坊主三　　來い！（中腰よろしく身構へる。）

二人とも容易に落さない。

小坊主一　　いゝ加減にして譲れよ。なあ。……いゝだらう。（あつち、こつちと二人の間を行き來する。）

小坊主二　　（手を上げて。）ストツプ。さあ、代つてやる。（小坊主一にミットを渡す。）

小坊主一は喜んで始めるが、下手で落してばかりゐる。

小坊主三　　澄ちやん。しつかりやれよ。

小坊主二　　プレーをかけられないなあ。

小坊主一　　いゝよ。遠慮なくかけれ。（と言つて又落す。）

小坊主二　　そんなに落してばつかりゐたら、直ぐゲームセットになるからよ。

小坊主一　　なつてもいゝだよ。（さすがに口惜しさう。）

小坊主三は加減してノロノロと投げてやる。小坊主一には分つてゐても受けられるので機嫌がいい。
ピアノ止む。若僧が上手から廣間へ来る。

若僧 良念さん。五十嵐さんへ出かけるよ。

小坊主三 ばい。

若僧 ベースボールばかりやつてゐれば、疲れてお佛壇の前で居睡りするよ。

小坊主三 (ボールを投げて。) 澄ちゃん。止めような。

小坊主一 あゝ。(ボールを受けて止める)

若僧 おいでよ。(去る。)

小坊主三 (二人に。) 行つて来るよ。(去る。)

残つた二人は、再び始めようとしてゐると、紺緋の袷に着換へた住職が奥庭の縁側から来る。二人は思はず一禮してかきこまる。

住職 やつて御覽。

小坊主二 もう止めたところです。

住職 さうか。では、澄雲はお茶、東海は私の居間からお菓子を持つておいで。

小坊主一 此處へでござりますか。(喜ばしげな聲である。)

住職 うむ。お茶は三人分だよ。お菓子は箱のまゝ持つておいで。

小坊主一・二（弾んだ聲で。）はい。（去る。）

間もなく、茶と菓子が運ばれる。

住職（前庭の縁近く坐して。）さあ、此処へ置いて。遠慮なくお食べ。（菓子を二人に取つてやる。）

小坊主二　ありがたうござります。

小坊主一　ご馳走さまでござります。

住職（食べながら。）美味しいかい。

小坊主一・二　はい。

住職　今日の法事のお菓子だよ。

小坊主二　私共は饅頭を二つづつ貰ひました。

住職　春になつてから法事が續くね。

小坊主一　三日置きだと長老様がおつしやりました。

住職　法事があると嬉しいかい。

小坊主一・二（正直に。）え、。

住職　寺へ來てから何が一等楽しみだい。

二人は黙つて微笑し合ふ。

住 職 (小坊主三に。) 君は村上だつたかね。

小坊主二 い、え。藤塚濱でござります。

住 職 と、漁師村だね。

小坊主二 はい。

住 職 東海の家は？

小坊主二 赤川でございます。

住 職 二人とも家へ歸りたいとは思はないか。

小坊主 (顔を見合わせて。) い、え。

住 職 お寺の方がい、んだね。

小坊主二・二 はい。

住 職 何うしてお寺へ上つたの。

小坊主二 漁師になるより坊さんになつた方が後生もい、し、暮しも心配がないからと言はれて來ました。

小坊主二 私は長老様が好きで一緒に居たくて來ました。

住 職 兄弟は。

小坊主二 十人兄弟で、私が末でござります。父親は、男の子九人あれば澤山だ。この子の身は如何様なりと

御勝手にと長老様に言ひました。

住 職 お寺へ來て本當によかつたと思ふかい。

小坊主二 はい。廣くて綺麗で住心地もい、し、御馳走もいたゞかれます。

小坊主二 ボールも出来るし、面白い話も聞かれます。家に居た時より身體も丈夫になりました。